

は FAMT が、1.3~7.1: (平均 3.5), FDG が、4.2~15.9: (平均 9.7) であった. FAMT と MIB-1 標識指数との間には正の相関 ($r=0.878$) が見られた. FDG と MIB-1 標識指数との間にも正の相関 ($r=0.643$) が見られた. 【結論】 MIB-1 の発現は、腫瘍細胞の増殖を反映する. 今回の検討から、口腔扁平上皮癌の腫瘍増殖能は、FAMT および FDG-PET により推定できることが示唆された.

26. 再度の腸骨移植を必要とした口唇・口蓋裂症例の検討

根岸 明秀, 五味 暁憲, 宮崎 英隆
牧口 貴哉, 横尾 聡

(群馬大院・医・顎口腔科学)

口唇・口蓋裂症例では計画に基づく一貫治療が一般的になり、顎裂に対し適時に骨移植を行うことにより良好な歯槽形態の回復がなされるようになった. しかし、移植骨量の不足、閉鎖弁の緊張等に起因した歯槽高径の低下により再度の骨移植が必要になる場合もある. 今回、他院にて腸骨移植による顎裂閉鎖術が施行されたものの、歯槽形態が不良なため矯正歯科医より再度の骨移植を依頼された症例について検討したので報告する.

2000 年 4 月より 2010 年 9 月に当科にて腸骨移植による顎裂閉鎖術を施行した 45 例中再骨移植術であった 18 例 23 顎裂を対象とした.

裂型は片側唇顎口蓋裂 11 例、両側唇顎口蓋裂 4 例、片側唇顎裂 2 例、両側唇顎裂 1 例であった. 他院での初回骨移植術は 6~15 歳時であり、2 例は 2 回の骨移植が施行されていた. 再骨移植術前の顎裂部は、狭小な骨架橋が 4 顎裂に認められたが、他は骨の連続性は失われ、11 顎裂では移植骨が消失していた. 顎裂閉鎖弁は、歯肉弁+口蓋弁 9 例、歯肉弁+舌弁 3 例、頬粘膜弁 6 例であり、11 例に瘻孔を認めた. 当院での再骨移植術は初回から 2~12 年後に施行された. 移植骨量は 3.5~15.5g であり、閉鎖弁は歯肉あるいは頬粘膜伸展弁と口蓋弁を用いたが、十分な減張操作が必要であり、残存骨の除去や顎裂部への萌出歯の抜去が必要な場合もあった. 術後 6 か月以上の顎裂部の画像評価では、軽度の骨吸収を認めた 5 顎裂以外は、十分な骨架橋が得られた. また、瘻孔再発は認めなかった.

口唇・口蓋裂症例では顎裂部への骨移植による歯槽堤再建は必須の手術である. 前回手術の詳細は不明であるが、移植骨量の不足、移植床や閉鎖弁作製方法の問題点が示唆された. また、再骨移植後に軽度の骨吸収を認めた症例もあり、再骨移植術は困難になる要因が多くなるため、初回骨移植術は適切な手技により、十分量の骨を移植することが重要と考えられた.

27. 開鼻声値の評価基準の検討—口蓋裂患者および口腔癌患者の言語評価に向けて

五味 暁憲,¹ 根岸 明秀,¹ 平原 成浩²
緒方 祐子,² 宮崎 秀隆,¹ 牧口 貴哉¹
高山 優,¹ 横尾 聡¹

(1 群馬大院・医・顎口腔科学)

(2 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科口腔顎顔面外科学)

【目的】 口蓋形成術後や上顎腫瘍術後の鼻咽腔閉鎖機能について、開鼻声の評価にナゾメーター検査は有用と言われているが、健常者の開鼻声値を報告したものは少ない. 我々は鼻咽腔機能評価をするためのナゾメーターの基準値を設定することを目的に、健常者の開鼻声値を調査してきた. 開鼻声値は性や方言などの影響を受けると言われており、検査基準を作成するにあたり性差、地域差を検討する必要がある. 今回は健常成人の開鼻声値の性差、地域差について検討した. 【対象】 性差の検討は、健常成人 124 名 (男性 71 名、女性 53 名) で行った. 平均年齢は 25.5±5.3 歳 (男性 26.0±5.3 歳、女性 24.8±5.2 歳) であった. 地域差の検討は健常成人男性に限り、関東地方出身者 12 名 (28.2±4.9 歳)、関西地方出身者 12 名 (25.5±1.5 歳)、九州地方出身者 38 名 (26.0±3.8 歳) で行った. 【方法】 Nasometer II 6450 を用い、母音/a/~/o/, 口唇音/p/, /b/, 歯茎音/tsu/, 短文 (低圧文「よういはおおい」、高圧文「きつつきがきをつつく」) を発話した際の開鼻声値 (%) を得た. 【結果と考察】 <性差> 母音の平均値は/i/が最高で 39.0±19.1% であった. 子音、低圧文、高圧文はいずれも 30%未満の値であった. Mann-Whitney の U 検定を用いた男女間の比較では /o/, /b/以外は有意差を認め、評価基準値は男女別に必要があると考えた. <地域差> 母音では 3 群とも/i/が最も高く、関東群 43.6±14.8%, 関西群 20.3±16.4%, 九州群 35.4±16.9% であり、関東群は関西群より有意に高かった. 子音は 3 群とも被検音間に差は認めず、地域差も認めなかった. 低圧文、高圧文は関東群が他群より高い傾向を示した. 母音で地域差を認めたことから、地域別基準値を検討する必要があると考えた.

28. 大胸筋皮弁再建における内側胸筋神経温存・再形成の意義

高山 優, 宮崎 英隆, 牧口 貴哉
横尾 聡 (群馬大院・医・顎口腔科学)

【はじめに】 大胸筋皮弁 (以下 PMMC) は、血管柄付き遊離皮弁がルーチンに導入されるまでは、顎口腔再建の中心的な再建材料であった. しかし、ローテーション・アークの問題の他に、筋体の早期萎縮や脂肪量の減少が著しく、術後の機能や整容性に影響が出やすい皮弁であ